中学校学習指導要領社会における地理的見方・考え方の潮流

*吉　田　　剛

The Trend of Gepgraphical "*MIKATA-KANGAEKATA* (Perspective-Thinking Skills Using Basic Geographical Concepts)" in Social Studies Education of The Japanese National Standard (Junior High School Level)

YOSHIDA Tsuyoshi

要　旨

現行中学校学習指導要領（現行版）社会科地理的分野の事例調査学習は、新学習指導要領（平成20年新版）で消滅し、地誌学習が復活した。地理的見方・考え方は現行版では事例調査学習とともに強調されたが、新版でも同様に分野目標の中核として根付いていた。地誌学習における地理的見方・考え方の育成の効果的なあり方を探究する必要性もあるが、わが国の社会科の歩みとともに、それがどのように指示されてきたか解明しておく必要がある。そこで本稿では、昭和22年版からの中学校学習指導要領（指導書・解説）地理的見方・考え方に関わる記述を分析・考察することを通してその潮流を明らかにする。その結果であるが、昭和22・26年版には「地域的特色および地方的特殊性と一般的共通性」・「地域間相互依存関係」・「自然と人間生活との関係」の地理的基本概念が指示されていた。それらは潮流の３主流となって、昭和33年版「地理的見方・考え方」の出現とともに概念的整理や構造性を伴いながら、地理的見方・考え方の内容構成を担い続け、現行版と新版の構造性の大きな変容によって複雑に関係付けられたが、今日まで引き継がれていた。潮流は、①地理的基本概念の源流期（昭和22年版）、②地理的基本概念の確立期（昭和26・30・33年版）、③地理的見方・考え方としての地理的基本概念の内容構成期（昭和44・52年版と平成元年版）、④地理的見方・考え方の構造化期（現行版と新版）の４期からみることができる。潮流から地理的基本概念そのものは概ね不変的なものとして位置付くが、一方で各年版の内容やその取り扱いの特色に応じて、地理的見方・考え方の構造性や地理的基本概念の重みや捉え方が移り変わってきたことも明らかとなった。

Key words：社会科教育、地理的基本概念、地理的分野目標、新学習指導要領

１．はじめに

澁澤（1998）は中学校社会科地理的分野のカリキュラム構成にて身近な地域の学習と都道府県の学習を繋ぐ事例・学び方学習を先駆けて論じ、それが世界の諸地域の事例学習も含め、地域規模に応じた事例調査学習となって、現行版（平成10年版）の中学校学習指導要領社会において活かされるかたちとなった[1)]。しかし今日、文部科学省より平成20年３月に中学校学習指導要領本体が公示され、平成20年７月には中学校学習指導要領解説社会編（以後、新版と表記）が公示された[2)]。その中で地域規模に応じた事例調査学習は消滅し、それに代わって、再び地誌学習が復活することとなった。その背景には、授業時数削減に基づく現行版の地域規模に応じた事例調査学習などの学習に対して、研究者・現場サイドの生産的な反応や実践的な成

＊ 大学院教育学研究科・社会科教育講座

果が十分に得られなかったことなどが窺える。細かくは、これまで地誌学習を学び、教えてきた教師の地誌学習に対する執着や教える内容の削減に対する戸惑い、教材研究を要することの少ない生徒任せの形骸化した調べ学習の出現、作業体験あるいは話し合いや発表を取り入れた授業の強調による授業マネジメント上の匙加減の不安定さ、大単元の「地域規模に応じた事例調査学習」から続く「世界の中の日本」への連結の困難さや授業時間の不足、そして多忙化する教師の授業構成力・展開力の衰えなどの問題点が指摘できる。

荒井（1999、2001）は、地域規模に応じた事例調査学習を発展させ、少ない授業時数の中で、地理的見方・考え方の育成に必要な一般的共通性や地方的特殊性および地域的特色などの観点を重んじ、生徒の個人やグループの発表から多くの諸地域に関する知識を共有化させる優れた実践を行っている。この実践は、新版の地誌学習に展開し得る側面をもつが、教師が教えるべき学習内容の構造化を省略する恐れや、生徒の個人やグループの主体的な調べ学習によって不足しがちな地理的認識をどの程度養わせられるかといった課題が残る。

吉田（2003ｂ）は、認知心理学の理論を援用しながら、小中学校社会科で養われた社会認識をもつ高校１年生を対象とした世界の国々に関する国名・位置認知調査に基づき、地域規模に応じた事例調査学習によって国名や位置に関する認識が不足しがちでばらばらになっている可能性を指摘した。また不十分な記憶による空間認識から地理的イメージの歪みやその基での地理的見方・考え方の困難化、そして誤った地理的認識や推論（ラベリングなど）を呼び起こす恐れについて指摘した[3)]。そして吉田は、大陸の枠組みを重視して多くの大陸構成国を動態地誌から取り上げていくカリキュラム編成の必要性から、中学校では動態地誌を中心とし、そこに発達段階に応じた地理的見方・考え方の育成場面を組み込むための原理の必要性を主張した。このような成果は、新版の世界地誌学習や日本地誌学習あるいはそれへの地理的見方・考え方の育成場面の組み込みに関して活かされるものとなろう。

以上から新版の実践を見据えると、理論的にも実践的にも、地誌学習における地理的見方・考え方の育成の効果的なあり方が課題となろうが、その大前提として、従前から続く、中学校学習指導要領社会の解説や指導書における地理的見方・考え方に関する記述とその意味について、社会科地理的分野構造の中で理論的に解明しておかなければならない。

そこで本稿では、とくに社会科が成立した戦後以降に焦点を当て、昭和22・26・30・33・44・52年版そして平成元年版・現行版・新版の中学校学習指導要領社会科地理的分野の地理的見方・考え方に関する記述の分析・考察を通して、その潮流について明らかにする。

方法は、文部省・文部科学省中学校学習指導要領社会の指導書・解説における記述を分析対象とする。そして現在から過去へ遡ってみる手法から、各年版の学習指導要領の改訂の要点と社会科の特徴、社会科目標・地理的分野目標・地理的見方・考え方の関係、地理的見方・考え方の内容構成や構造性に着目して経年的に分析・考察する。地理的見方・考え方という用語がみられない年版においては、地理的基本概念に関する記述から分析・考察する。一般的に地理的見方・考え方には、地理学に基づく地理的基本概念がその中核を担っているからである[4)]。

２．中学校学習指導要領社会の改訂と地理的見方・考え方

学習指導要領地理的見方・考え方に関する記述の現在から過去へかけてのアウトラインについて、岩田（2003）による「経験主義」・「内容主義」・「事例主義」・「方法主義」による経年的な説明[5)]を頼りにしながら、新たに筆者による平成元年版・現行版・新版の検討も加えて分析・考察すると、第１表のように概ねまとめられる。

１）新版と現行版（平成20・10年版）（第１図）

新版地理的見方・考え方は現行版と同様、地理的分野目標の中核を担い、その内容構成や構造性が説明されている。第１図を掘り下げると、地理的分野の目標⑴は社会科目標に繋がる基本的な目標であり、目標⑵・⑶は目標⑴の具体的なねらい、目標⑷は地理的分野の学習を通して身に付けさせる能力と態度となっている。この中で地理的見方・考え方は目標⑴の一部に明示され、目標⑵・⑶においてそれを構成する基本的な概念と関連付けて示されている。この目標⑵・⑶の内容は、さらに現行版と同様に、５項目の地理的見方・

第１表　戦後中学校学習指導要領の変遷における地理的見方・考え方（吉田剛作成）

学習指導要領 *	戦後社会科地理の変遷 ■岩田(2003)の見解	※社会科目標と地理的分野目標の関わり ** 〇地理的見方・考え方に関連する記述　**
昭和 22 年版(昭和 22 年)①	■「経験主義」 ・地域重視と相互依存関係重視によって地理的内容が多く含まれていた。	※社会科目標(4)～(8)は地理的で，地理的条件，環境，地域的特色などの地理的基本概念の記述が見られる。 〇冒頭部「社会科とは」で，人間と自然，地域的特色，地理的条件などの地理的基本概念の記述が見られる。第 1・2 学年は地理，公民的分野を中心に単元構成され，中学校第１学年(Ⅰ)(Ⅳ)(Ⅴ)，中学校第２学年(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)(Ⅴ)は地理的で，地理的基本概念の意味が問われている。
昭和 26 年版(昭和 27 年)②		※社会科の指導目標「理解」の(4)(5)(6)は地理的で，人間と自然，地域的特色，地方的特殊性と一般的共通性，地域間相互関係などの地理的基本概念の記述が見られる。 〇中学校第 1 学年は地理，第 2 学年は地理・歴史分野を中心に単元構成され，第１学年の単元２・３・４，第２学年の１・２・３は地理的で，地理的基本概念の意味が問われている。
昭和 30 年版(昭和 30 年)③	■「内容主義」 ・世界と日本の諸地域による静態地誌学習の典型 ・ザブトン型１年次履修	※社会科目標(3)は地理的分野目標に関わる。(p.4) 〇社会科目標(3)解説部や地理的分野(2)内容に「地理的な考え方」が一部出現。地理的分野の具体目標 1,2,3,7 は，地域の特色，人間と自然，地域間相互関係などの地理的基本概念の意味が問われている(pp.6-12)
昭和 33 年版(昭和 34 年) ④		※社会科目標(2)は地理的分野目標に関わり(pp.5-10)，新版地理的見方・考え方の基本目標の原形といえる。 〇地理的見方・考え方は地理的分野目標(5)の解説部に出現。地理的分野目標(1)～(4)で地域的特色，地方的特殊性と一般的共通性，地理的条件，地域間相互関係，人間と自然などの地理的基本概念は指示され(pp.16-24)，次年版以降の地理的見方・考え方の内容の中核となる。「【内容】(1)郷土」で多く出現。郷土学習や地理学習全体における意義に関する記述が見られる(pp.25-32)。
昭和 44 年版(昭和 45 年)⑤	■「内容主義＋事例主義」 ・π型履修，小学校世界地誌が静態地誌から事例学習へ。 ・中学校への世界地誌移行による世界地理学習先習，静態地誌踏襲，内容精選	※社会科具体的目標3つ全て地理的分野目標5つ全てに関わる(pp.9-13)。 〇基本目標(1)，具体的目標（地理的見方・考え方関係）:(2)(3)(4) 〇地理的見方・考え方の内容は 6 つ，「内容」解説部に見方と考え方の区別内容が簡易に説明される。(pp.25-32)
昭和 52 年版(昭和 53 年)⑥		※社会科目標は地理的分野目標(1)に関わる(pp.17-18)。 〇基本目標(1)，具体的目標（地理的見方・考え方関係）:(2)(3)(4) 〇地理的見方・考え方の内容は 6 つ。
平成元年版(平成元年)⑦	■「内容主義＋事例主義＋方法主義」（「内容主義＋事例主義」**） ・事例主義「世界の諸地域様々な地域」，「調べる」技能の強調	※社会科目標は地理的分野目標(1)に関わる(pp.15-17)。 〇基本目標(1)，具体的目標（地理的見方・考え方関係）:(2)(3)(4) 〇地理的見方・考え方の内容は 7 つ。位置や空間的な広がりなどに関する内容が付加され，構造性を帯びる（いわゆる，見方の明示）。
平成 10 年版(平成 11 年)⑧ 現行版	「事例主義＋方法主義」** ・事例主義拡大「日本諸地域」，調べ・課題学習の強調	※社会科目標は地理的分野目標(1)に関わる(pp.21-23)。 〇基本目標(1)，具体的目標（地理的見方・考え方関係）:(2)(3) 〇地理的見方・考え方の内容は大きく 2 つ，細かく 4 つ，構造性が細かく示される。
平成 20 年版(平成 20 年)⑨ 新版	「内容主義＋方法主義」** ・事例主義から動態地誌復活，地理的見方・考え方と地理的技能ほか学習過程を強調	※社会科目標は地理的分野目標(1)に関わる(pp.20-22)。 〇基本目標(1)，具体的目標（地理的見方・考え方関係）:(2)(3) 〇地理的見方・考え方の内容は現行版と同様。

*( )内は、中学校学習指導要領解説（指導書）社会編の発行年。①文部省(1947a):『学習指導要領 社会科編(Ⅰ)（試案）昭和二十二年度』，東京書籍，178p.　文部省(1947b):『学習指導要領 社会科編(Ⅱ)（第七学年ー第十学年）（試案）昭和二十二年度』，東京書籍，302p.　②文部省(1952):『中学校高等学校学習指導要領社会科編 Ⅱ一般社会科（中学校１年ー高等学校１年 中学校日本史を含む）（試案）昭和 26 年(1951)改訂版』，明治図書，205p.　③文部省(1956):『学習指導要領社会科編 昭和 30 年度改訂版』，二葉，41p.　④文部省(1959):『中学校社会指導書』，実教出版，310p.　⑤文部省(1970):『中学校指導書社会編』，大阪書籍，448p.　⑥文部省(1978):『中学校指導書社会編』，大阪書籍，202p.　⑦文部省(1989):『中学校指導書社会編』，大阪書籍，173p.　⑧文部科学省(1999):『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説ー社会編ー』，大阪書籍，208p.　⑨文部科学省(2008):文部科学省ホームページ（ http://www.mext.go.jp/2008 年 8 月 20 日確認）　** 吉田による分析・解釈

考え方の内容構成に整理され、「地理的見方の基本」「地理的考え方の基本」「地理的考え方を構成する３本柱」などの意味付けからその構造性が説明されている。ただし新版では事例調査学習から地誌学習へと復活したことによって、現行版の分野目標(1)「～我が国の国土の地域的特色を考察し～」が新版(1)の「～我が国の国土及び世界の諸地域の地域的特色を考察し～」へ、現行版(2)「～地域的特色をとらえるための視点や方法を身に付けさせる」が新版(2)の「～地域的特色や地域の課題をとらえさせる」へと改訂された。

社会科目標 p.20.：広い視野に立って，社会に対する関心を高め，諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し，我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め，公民としての基礎的教養を培い，国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

地理的分野の目標

目標(1)p.22.	目標(2)p.25.	目標(3)p.26.	目標(4)pp.29.
日本や世界の地理的事象に対する関心を高め，広い視野に立って我が国の国土及び世界の諸地域の地域的特色を考察し理解させ，地理的な見方や考え方の基礎を培い，我が国の国土及び世界の諸地域に関する地理的認識を養う。	日本や世界の地域の諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえ，それを地域の規模に応じて環境条件や人間の営みなどと関連付けて考察し，地域的特色や地域の課題をとらえさせる。	大小様々な地域から成り立っている日本や世界の諸地域を比較し関連付けて考察し，それらの地域は相互に関連し合っていることや各地域の特色には地方的特殊性と一般的共通性があること，また，それらは諸条件の変化などに伴って変容していることを理解させる。	地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め，様々な資料を適切に選択，活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。
＜基本的な目標＞	＜具体的なねらい＞		＜能力と態度＞
	地理的な見方や考え方を構成する基本的な概念と関連付けて示している。p.22.		地理的分野の学習を通して育成する。p.22.

○目標の(2)は，地理的な見方・考え方の基礎を培い，地域的特色や地域の課題をとらえさせるという地理的分野のねらいを具体的に示している。
○目標の(3)は，地域的特色の特質，性格についての考え方を地理的な見方や考え方を構成する概念と関連付けて示したもの。
○地理的な見方・考え方は相互に深い関係があり，本来は一体的にとらえるもの。地理的な見方とは，日本や世界にみられる諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりで地理的事象として見いだすこと。地理的な考え方とは，それらの事象を地域という枠組みの中で考察するいうこと。地理的分野の学習の全般を通じて培うものであり，系統性に留意して計画的に指導することが必要である。・・・【構造性】

①どこに，どのようなものが，どのように広がっているのか，諸事象を位置や空間的広がりとのかかわりでとらえ，地理的事象として見いだすこと。また，そうした地理的事象にはどのような空間的な規則性や傾向性がみられるのか，地理的事象を距離や空間的な配置に留意してとらえること。
②そうした地理的事象がなぜそこでそのようにみえるのか，また，なぜそのように分布したり移り変わったりするのか，地理的事象やその空間的な配置，秩序などを成立させている背景や要因を，地域という枠組みの中で，地域の環境条件や他地域との結び付きなどと人間の営みとのかかわりに着目して追究し，とらえること。
③そうした地理的事象は，そこでしかみれないのか，他の地域にもみられるのか，諸地域を比較し関連付けて，地域的特色を一般的共通性と地方的特殊性の視点から追究し，とらえること。
④そうした地理的事象がみられるところは，どのようなより大きな地域に属し含まれるのか，逆にどのようなより小さい地域から構成させているのか，大小様々な地域が部分と全体とを構成する関係で重層的になっていることを踏まえて地域的特色をとらえ，考えること。
⑤そのような地理的事象はその地域でいつごろからみられたのか，これから先もみられるのか，地域の変容をとらえ，地域の課題や将来像について考えること。

①見方の基本，②考え方の基本，③・④・⑤考え方を構成する主要な柱

第１図　平成20年版中学校社会科地理分野目標における地理的見方・考え方の内容と構造
ー文部科学省『中学校学習指導要領（平成20年７月）解説社会編』よりー（吉田剛作成）

新版と現行版の地理的見方・考え方には、内容項目①（地理的見方の基本）「どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか、～」と、②（地理的考え方の基本）「そうした地理的事象がなぜそこで～」でみられるように疑問詞が付け加わり、③④⑤も含めて地理的事象の捉え方や探究の仕方が一層明示された。とくに新版では⑤「～地域の課題や将来像について考えること」も指示され、課題から価値判断へ、どうすべきかといった問いによって、社会科の公民的資質の育成に繋がる価値判断や意思決定が求められる。よって新版と現行版では、平成元年版の地理的見方・考え方から、学習過程を意図する問いとともにその構造性が詳細に示された。また、新版と現行版の分野目標や地理的見方・考え方の内容構成は、昭和44年版（第２図）にその原形が求められる。

地理的技能は、現行版と同様に新版においても地理的見方・考え方と密接な関係があると指示された。新版では、地理的見方・考え方と地理的技能の育成に不可欠な学習過程やその展開例が、①「世界の様々な地域の調査」、②「日本の諸地域」、③「身近な地域の調査」において一層具体的に示され、両者の関係は具体的な学習過程の例示とともに強調された。さらに新版では、中教審答申の改善案を踏まえ、教科用図書『地図』（一般図や主題図、その他写真資料など）の十分

社会科目標 p.9.：地理，歴史および政治・経済・社会などに関する学習を通して，社会生活についての理解と認識を養い，民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な資質の基礎をつちかう。

社会科の具体的な目標 pp.10-12.

1　広い視野に立って，わが国土に対する認識とわが国の歴史に対する正しい理解を深め，その基礎の上に，わが国の公民としての基礎的教養をつちかうとともに個人の尊厳と人権の尊重が民主的な社会生活の基本であることを自覚させて，国家・社会の進展に進んで寄与しようとする態度を養う。	2　世界におけるわが国の役割を理解させて，国民としての自覚を高めるとともに，国際理解を深め，国際協調の精神を養い，世界平和と人類の福祉に貢献しようとする態度を育てる。	3　経済・社会・文化などが急速に変化発展している日本や世界の現状に目を開かせ，さまざまな情報に対処し，確実な資料に基づいて公正に判断しようとする態度とそれに必要な能力の基礎をつちかう。

地理的の分野目標

目標(1)p.25.	目標(2)pp.27.	目標(3)p.28.	目標(4)p.30.	目標(5)p.33.
日本や世界のさまざまな地域についての学習を通して，地理的な見方や考え方の基礎をつちかい，わが国土に対する広い視野に立った認識を養うとともに，国土を高度かつ合理的に利用することがたいせつであることを理解させ，わが国の発展に努力しようとする態度を育てる。	地理的事象には地方的特殊性と一般的共通性があることに気づかせ，それらを生み出した地理的諸条件について考察させるとともに，各地域やそこに住む人々の生活を正しく理解するための基礎をつちかう。	日本や世界には大小さまざまな地域的なまとまりがあり，それらが相互依存の関係にあることを理解させるとともに，国際社会における日本の役割を考えさせ，国家および世界の一員としての自覚を深める。	自然及び社会的条件と人間との関係は，人間の活動によって絶えず変化し，それに伴って地域も変貌していることを理解させる。また，自然に対しては，これを適切に開発し保全することがたいせつであることを理解させる。	地理的事象に直接触れて正しく考察すること，地図・統計その他の資料を適切に取り扱うこと，地図や図表を描くこと，報告をまとめることなどに必要な能力を育てる。

5項目の中核 p.25 →　**地理的な見方や考え方**，目標の(2)，(3)，(4)に述べている。p.25.

【内容構成における主な観点】

○目標の(2)：地理的事象とは，地理的な観点に立って考察した場合の地表の諸事象をさす。したがって，自然的事象も社会的事象も，これを地理的に見，地理的に考えるとき，それらは地理的な事象となる。従来，ともすれば，その地域が，他地域に比べて目だって特殊な現象を把握することが地理の対象とされるきらいがあったが，そのような地方的特殊性も，実は一般的共通性がその底に横たわっているからこそ，特殊であり得たのである。

○目標の(3)：地域概念を身につけさせ，一つの地域は他の地域と複雑な結びつきをもっていることを理解させるとともに，国際社会における日本の役割を考えさせ，国家および世界の一員としての自覚に導くことを強調したものである。pp.28-29.

○目標の(4)：自然と人間生活との関係については，社会科の他の分野でも取り扱うことはあるが，地理的分野のそれに比べるとはるかに軽く，それだけにこの分野の学習においては，はっきりした指導の態度をもって臨む必要がある。p.31.

【地理的な見方や考え方の具体的な要約】p.25.

ア　地域の特色を他地域との比較，関連において考えること。
イ　地理的事象の性格や意味を地方的特殊性と一般的共通性の観点に立ってとらえること。
ウ　地理的事象を生み出した諸条件について考えること。
エ　日本や世界における大小さまざまな地域的まとまりを考えるとともに，それらの地域間の相互依存関係や競合関係について考察すること。
オ　自然および社会的条件と人間との関係について考察すること。
カ　地域の変貌に着目し，その動向や意味について考えること。

＊地理的な見方とは，現実の複雑な地表面の状態から，地理的事象を選別してとらえることであり，地理的な考え方とは，これらの事象について地理的に考察することであるが，・・・ア～カの内容に具体化することができよう。p.36-37.

第２図　昭和44年版中学校社会科地理分野における地理的見方・考え方の内容と構成
－文部省『中学校指導書社会編（昭和45年５月）』より－（吉田剛作成）

な活用、インターネットの利用やGISからの地図化などに関する記述もみられ、地理的技能の育成に有効な具体的な作業技能が強調された。

以上から、第１表のように新版は、事例主義から動態地誌への復活、そして地理的見方・考え方と地理的技能に関わる学習過程の強調によって、「内容主義＋方法主義」として特徴付けられる。現行版は、地理的見方・考え方に関しては新版と同様であるが、平成元年版からの事例主義の拡大と調べ課題学習の強調から、筆者はとりあえず内容主義を取り除き、「事例主義＋方法主義」として特徴付けたい。

２）平成元年版（第３図）

澁澤（1991）は、平成元年版の地理的分野の特色について、①世界地理を日本地理の背景に位置付けた内容構成、②授業時数削減から日本及び世界の諸地域学

社会科目標 p.15.：広い視野に立って，我が国の国土と歴史に対する理解を深め，公民としての基礎的教養を培い，国際社会に生きる民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

地理的分野の目標

目標(1)p.16.	目標(2)pp.17-18.	目標(3)p.18.	目標(4)p.20.	目標(5)pp.22-23.
世界を大観させる学習を背景に，日本の様々な地域についての理解を深めることにより，地理的な見方や考え方の基礎を培い，広い視野に立った我が国の国土に対する認識を養う。	日本や世界の各地域における人々の生活には地方的特殊性と一般的共通性のあることに気付かせ，それらを成り立たせている地理的諸条件について考えさせるとともに，人々の生活の地域的特色を理解するための基礎を培う。	日本や世界には大小様々な地域的なまとまりがあり，それらの地域は相互に関連し合っていることを理解させるとともに，国際社会における日本の立場や役割を考えさせる。	自然及び社会的条件と人々の生活の関係は人間の活動によって絶えず変化し，それに伴って地域も変容していることに気付かせ，環境や資源と人々の生活とのかかわりについて考えさせる。	地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め，様々な資料を適切に選択，活用して地理的事象を多面的に考察し公正に判断する能力と態度を育てる。
基本的な目標 p.16	具体的なねらい：「地理的な見方や考え方を構成する基本的な概念と関連付けて示している。」p.16.			地理的分野の学習を通してねらう能力と態度 p.16.

【内容構成における主な観点】

○目標の(2)は，主として地域的特色についての見方や考え方を示したものである。地域的特色は「地方的特殊性と一般的共通性」から構成されている。・・・・p.18.

○目標の(3)は，主として地域についての考え方を示したものである。p.19.

○目標の(4)は，主として環境についての考え方を示したものである。環境は，地理的分野の学習における重要な基本的概念となっており，地域の特色や地理的事象の成立と深くかかわっている。p.20.

【地理的な見方や考え方の具体的な要約】p.17.

①地域の諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえること。

②人々の生活の地域的特色を他地域との比較，関連においてとらえること。

③人々の生活の地域的特色に関する諸事象の性格や意味を地方的特殊性と一般的共通性の観点に立ってとらえること。

④人々の生活の地域的特色に関する諸事象を成り立たせている地理的諸条件について考えること。

⑤日本や世界における大小様々な地域的なまとまりを考えるとともに，それらの地域間の相互依存関係や競合関係について考えること。

⑥自然及び社会的条件と人間との関係について考えること。

⑦地域の変容に着目し，その動向や意味について考えること。

第３図　平成元年版中学校社会科地理分野における地理的見方・考え方の内容と構成
－文部省『中学校指導書社会編（平成元年７月）』より－（吉田剛作成）

習の網羅的な取り扱いや内容重複を避け、日本や世界を大観させ、諸地域学習を事例学習とした地理的な見方・考え方の重視、③人々の生活に関する内容の充実や世界と日本を比較し関連付けてとらえる項目の新設などから説明している[6)]。その強調された地理的見方・考え方に関する記述には、昭和44･52年版（第２・４図）の内容構成に、新たに①「地域の諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえること」といった地理的事象の把握に関する項目が付け加わった。また第３図下枠「内容構成における主な観点」において、分野目標⑵で地域的特色の見方・考え方、⑶地域の考え方、⑷環境の考え方が指示され、３つの地理的基本概念を中心に地理的見方・考え方の構造がシンプルに示された。よって、平成元年版の地理的見方・考え方は、その内容構成は大幅に変容したわけではないが、シンプルな構造を帯び、理念的ながらも強調されたようにとれる。しかし、平成元年版と、新版や現行版を比較すると、その構造は不十分であり、新版と現行版の地理的見方・考え方の構造化への準備段階として位置付けられる。そこで本稿では、岩田（1998）の解釈とはやや異なるが、平成元年版について、やはり昭和44・52年版と同様な「内容主義＋事例主義」として解釈したい。

３）昭和52年版（第４図）

昭和52年版では教科カリキュラム上、小中高一貫社会科が成立し、その中で一本化された社会科目標に地理的分野目標が繋がり、分野間の関連は強調されながらも系統性を備えたものとなった[7)]。また地理的見方・考え方は、昭和44年版と同様の意味合いの位置づけを保った。篠原（1989）によれば、昭和52年版の背景には教育内容過密に起因する諸種の学力問題と、後述するが「教育の現代化運動」の反動としての人間化の影響がある。それは目標⑵の解説部「～の人々の生

社会科目標 p.4.：広い視野に立って，我が国の国土と歴史に対する理解を深め，公民としての基礎的教養を培い，民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

地理的分野の目標

目標(1)p.17.	目標(2)pp.18-19.	目標(3)p.20.	目標(4)p.22.	目標(5)p23.
日本や世界の様々な地域についての学習を通して，地理的な見方や考え方の基礎を培い，広い視野に立った我が国土に対する認識を養う。	日本や世界の各地域における人々の生活には，地方的特殊性と一般的共通性のあることに気付かせ，各地域やそこに住む人々の生活を正しく理解するための基礎を培う。	日本や世界には大小様々な地域的なまとまりがあり，それらが相互に関連し合っていることを理解させるとともに，国際社会における日本の役割を考えさせる。	自然及び社会的条件と人間との関係は，人間の活動によって絶えず変化し，それに伴って地域も変容していることに気付かせるとともに，環境や資源の重要性についての認識を養う。	地理的事象に直接触れてそれを正しく考察することに必要な能力と，地理的事象を適切な資料に基づいて多面的に考察し公正に判断しようとする態度を育てる。
基本的な目標 p.17	具体的なねらい：「地理的な見方や考え方に基づく地理学習の基本的な概念とそれぞれの概念に即した具体的なねらいを示している。」p.17.			地理的分野の固有の能力と態度 p.23.

【内容構成における主な観点】

○目標の(2)は，日本や世界の諸地域の人々の生活を正しく理解するための地理的な見方・考え方を具体的に示したものである。この目標には，今回の改訂の基本的な方針である「人間尊重の立場を基本」とする趣旨が強く含まれている。p.19.

○目標の(3)は，目標の(1)の「様々な地域についての学習」をより具体化したものである。大小様々な地域的まとまりとは，地理学習の基本的な概念の一つである地域の概念を意味している。p.20.

○目標の(4)は，主として環境についての考え方を示したものである。環境は，地理学習における重要な基本的概念となっており，地域の特色や地理的事象の成立には，様々な環境条件における人間の意志や営みが強くかかわっている。p.22.

【地理的な見方や考え方の具体的な要約】pp.17−18.

ア　地域の特色を他地域との比較，関連においてとらえること。

イ　地域の人々の生活に関する諸事象の性格や意味を，地方的特殊性と一般的共通性の観点に立ってとらえること。

ウ　地域やそこに住む人々の生活に関する諸事象の特色を生み出した地理的な諸条件について考えること。

エ　日本や世界における大小様々な地域的まとまりを考えるとともに，それらの地域間の相互依存関係や競合関係について考えること。

オ　自然及び社会的条件と人間との関係について考えること。

カ　地域の変容に気付かせ，その動向や意味について考えること。

第４図　昭和52年版中学校社会科地理分野における地理的見方・考え方の内容と構成
－文部省『中学校指導書社会編（昭和53年５月）』より－（吉田剛作成）

活を正しく理解するための地理的見方・考え方を～」といった、改訂の基本方針「人間尊重の立場を基本とする」に反映され、知識・概念や思考技能だけでは留まらない地理的見方・考え方の位置づけが読み取れる。第２図から昭和44年版では、「地理的見方・考え方は目標⑵⑶⑷に述べる」といった指示に留まるが、昭和52年版より、分野目標に地理的見方・考え方に関する「基本的な概念」や「具体的なねらい」の説明が加えられ、分野目標に地理的見方・考え方の位置付けが明確に整理され始めた。

４）昭和44年版（第２図）

昭和44年版は、新版や現行版の総体的な原形または基準点といえ、地理的見方・考え方の内容構成や、構造性に関する簡易な意味付けが初めて明示された。また社会科の具体的目標と地理的分野目標が複雑に関係づけられ、社会科としての繋がりが重視された[8)]。篠原（1989）はこの年版の背景に、「教育の現代化」から展開されたアメリカ合衆国の新社会科の影響があることを指摘している。新社会科は、ブルーナー（Bruner. J. S）などによる『The Process of Education』などに刺激されて、基本概念や構造に基づく教育内容から編成される。その特色は、概念や一般法則といった高度で抽象的なレベルでの把握や理解を目指し、社会諸科学を重視して基本概念を科学者が追究するのと同じように統一的にとらえようとする。篠原は、昭和44年版が地理的見方・考え方を地理学の基本的な概念と方法としてとらえ、分布・地域・環境などの基本概念から地理的認識へと導かせる地理学の方法原理が全面におし出されたと論じている[9)]。つまり昭和44年版は、「教育の現代化」を反映し、地理学を背景とした学力としての地理的見方・考え方の意義付けがなされたものといえる。

５）昭和33年版（第５図）

昭和33年版と昭和30年版は、知識羅列型の日本と世

社会科の目標 pp.5-10.　＊ 3は主として歴史的分野，4は主として政治・経済・社会的分野にかかわるもの。

1 自他の人格や個性を尊重することが社会生活の基本であることについての理解をいっそう深め，また民主主義の諸原則を理解させ，これを日常の生活に正しく生かしていく態度や能力を養う。	2 人間生活と自然との関係，地域相互の関係を考えさせ，人々の生活には地域によって特色があることや，その底には共通な人間性が流れていることを理解させ，広い視野に立って，郷土や国土に対する愛情を育てる。	5 世界におけるわが国の立場を正しく理解させ，国民としての自覚を高め，民主的で文化的な国家を建設して，世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする態度を養う。	○目標の各項目は，相互に密接な関連をもって，全体として社会科の目標をなすものであり，主として2，3または4のいずれかにかかわる指導においても，常に5をあわせて考慮する必要があり，さらに，すべての指導の根底に，1を考慮しておかなければならない。

↓

地理的分野の目標（第1学年の目標）pp.16-24.

(1) 郷土や日本における生活の特色を，他地域との比較・関連において明らかにし，郷土のわが国における地位やわが国の世界における地位を理解させ，郷土や国土に対する愛情を育て，わが国の発展に努力しようとする態度を養う。

(2)郷土，日本の諸地域，世界の諸地域における生活には，地方的特殊性と一般的共通性とがあることを明らかにし，それらが成立した自然的，歴史的，社会的の条件やその意義を総合的に考えさせ，他地域の人々を偏見や先入観にとらわれないで，正しく理解しようとする態度を育てる。

(3)日本や世界の各地域相互の関係がますます密接になってきたことを理解させるとともに，これらの各地域における生活を世界的視野に立って考えさせ，国家および世界の一員としての自覚を高め，協調の精神を養う。

(4)自然環境そのものはあまり変化しないが，人間の自然に対する働きかけのしかたは，科学・技術の進歩によって発展するものであることを理解させる。また，自然をいっそう利用して人間の生活を向上させるためには，自然を深く理解しその愛護に努めるとともに，適切な利用と開発の方法を創意しくふうすることがたいせつであることを理解させる。

(5) 野外観察や調査などを行い，地理的事象に直接触れ，これを正しく観察したり考察したりする態度や能力を養う。

(6)地図を読み，描き，これに親しませ，また，統計その他の資料を正しく取り扱わせて，いろいろな事象の実態，特色，傾向などを読み取る能力を育てる。

↓

地理的分野の目標(5)の解説部

○生きた学習をするためには，実地に地理的事象を観察し，これに疑問を起こし，これを正しく考察する能力を養うことがたいせつであるから，これが地理的分野の指導の重要な目標の一つでなければならない。そのためには，まず郷土の地理的事象に直接触れて，具体的に観察し調査し，また郷土の文献，統計その他の資料の調査をもあわせて，その実情をよく知り，その地理的意義を理解させ，さらにそれに関した問題点にも触れる必要がある。・・・こうした野外観察や調査をすることは，郷土ならびに旅行の途中や目的地についての理解を深めるとともに，地理的なものの見方や考え方をも実地に体得させることができる。p.23

第５図　昭和33年版中学校社会科地理分野における地理的見方・考え方に関わる記述
ー文部省『中学校社会指導書1959（昭和34年９月）』よりー（吉田剛作成）

界の諸地域による静態地誌学習の典型をとった。昭和33年版では、「１目標⑸」の解説部および「内容 (1) 郷土」の本文・解説部において、地理的見方・考え方の用語が初出し、郷土学習および地理学習全般においてその意義や方法が初めて示された[10]。また社会科目標⑵から結びつく地理的分野目標⑴〜⑷には、例えば、人々の生活、地方的特殊性と一般的共通性、地域相互の関係、自然と人間などに関する記述がみられ、新版や現行版の地理的見方・考え方に関する具体的な目標に繋がる。

滝口（1973）によれば、「地理的見方・考え方」ということばが学習指導要領に定着したのは昭和33年版（中学校社会編）である。その内容構成は昭和44年版（中学校社会編）で初めて示されたことから、昭和33年版頃には地理的見方・考え方という用語が既に定着し、昭和44年版にはその内容構成（第２図）が具体的に示された。また、朝倉・尾崎（1962）は、昭和33年版の第１学年の目標を基に、地理的見方・考え方が地理的分野の学習全体を通して養われるとして次のように要約している。①一つの地域における生活の特色を、他地域との比較、関連において考える。②各地域の生活には、地方的特殊性と一般的共通性とがあることを明らかにする。③各地域の生活が成立した自然的、歴史的、社会的な条件やその意義を総合的に考える。④他地域の人々を偏見や先入観にとらわれないで理解しようとする。⑤地域間の相互関係を考え、一地域の事象を日本全体、世界全体などの広い視野に立って考える。⑥人間生活と自然環境との関係を考える。これらは、昭和44年版地理的見方・考え方の内容構成（第２図）に直接的に繋がることから、昭和33年直後には、既に地理的見方・考え方の内容構成が錬られていたようにとれる。

社会科の目標 pp.2-5.

1　国家・地方公共団体，その他さまざまの社会集団における人間の相互関係についての理解を深め，これらの集団の機構や機能について，小学校よりもより広い見地から，系統だてて理解させる。そして歴史的背景や世界的視野の裏付けのもとに，現代日本において，政治・経済・社会・国際関係などにおいて，どのような問題があるかについて目を開かせ，日常生活を通して民主主義を現代のわが国の政治的，経済的，社会的活動に具体的に生かしていく能力や態度を養う。	2　日本の各時代の概念を明確につかませ，歴史の発展過程を総合的に理解させ，国家の伝統や文化について，正しい理解をもたせる。また，日本の歴史ばかりでなく，世界史的な内容を通して，日本史に関するものを主体としながらも，それとの関連において世界史の流れをとらえ，結果においては，その時代系列のあらましがつかめるようにする。そして，現代のわが国における政治的，経済的，社会的な諸問題が，どのような歴史的背景をもっているかを理解し，国家の伝統と課題について，歴史的考察力を養う。さらにまた，歴史は，人間の自然環境に対するはたらきかけや，社会をよくしていこうとする人々のたゆまない努力によって発展するものであること，歴史的発展には地域や民族によって特殊性があること，また各時代・各社会の人々の活動には共通な人間性が見られることなどについても理解させ，それによって，社会生活の発達に対する自己の責任感や，人間相互の関係における協調の精神を養う。	3　政治的，経済的，社会的，国際的観点を小学校よりも強化して，日本や世界の各地域の生活の特色を，他地域との比較・関連において明確につかませ，その地域の生産その他の諸事象が相互に関連性をもつことや，各地域が日本や世界の中で占めている地位について理解させる。なお世界の中でも，特にアジア＝太平洋地域における諸問題についての関心を深めること，これからのわが国では国民が自然環境に対して積極的に働きかけること，国際的協調に対して努力することなどがたいせつであることについても，理解を深める。そして，地域相互間の関係，人間と自然との関係を考察し，人々の生活は土地によって特色があるが，その底には共通な人間性が流れていることを理解して，わが国が当面している問題について地理的に考察する態度や能力を養い，国家や郷土に対する愛情を育てる。	4　小学校よりもさらに広く深い領域を学習させることにより，民主主義の諸原則についての理解をいっそう深め，それがわれわれの幸福にどのような関係をもっているかについて理解させ，これを実際の生活に活かしていく態度を養う。また，それぞれの具体的事象についての学習を通して，国を愛する心情や他国や他国民を敬愛する態度を養う。

↓

解説部

小学校の社会科では，人間生活が自然環境と密接な関連をもっていることを理解させ，自然環境に適応し，それを利用する態度や能力を養うことを，一つの目標としている。小学校で児童は，衣服・食物・居住や産業・自然環境について，その経験や理解に容易な具体的事象・人物を通じて，わが国や世界の代表的な諸地域の特色について大きくつかみ，また，人々の生活が自然環境と関係をもっていることや，郷土やわが国の生活は遠く離れた土地や外国の人々の生活と密接に結びつき合っていることなどについても着目するようになってきた。中学校の社会科においても，生徒の経験や具体的な事例を通じて，地理的な考え方・事実・特色・術語などに関する教養を高めていこうとする配慮はたいせつである。また，複雑な世界事情や，国際関係・地理的環境・政治・経済・地図投影などに関する高度の地理学的知識については，中学生に理解させるのにふさわしくないものがあるから，その内容については精選する必要がある。p.4.

↓

地理的分野　(1)具体目標　pp.6-17.

1.人々の生産活動その他の生活様式には，地域によってそれぞれ特色のあることを理解させるとともに，他地域の人々を，偏見や先入観にとらわれないで正しく理解していく態度を育てる。
2.人々や各地域間の相互関係は，ますます密接になってきたことを理解させるとともに，この密接に結びついた世界の中で，各人は郷土・国家の一員として，ひいては世界の一員として責任があることを自覚させる。
3. 自然環境は，人々の生活様式にいろいろな面で関係があるが，自然は人間の生活を決定するものではないということを理解させ，これからの日本では，自然に対する国民の積極的な態度がたいせつであることを認識させる。
4.日本や外国の各地域について，その地域を特色づけているいちじるしい事象に関係のある偉人，有名な探検家・旅行家・発見者・開拓者などの業績から，これらの人物の徳性について感銘するとともに，これからの人々の業績や考え方が，現在のその地域の人々や他の地域の人々にどのような影響をもってきているかということについて理解させる。
5.地図帳を読んだり，地図を描いたりする能力を育て，日常生活において地図を親しみ，よくこれを利用していく態度を育てる。
6.統計・資料を正しく取り扱い，これらの資料から，いろいろな事象に関する事実や特色や傾向を読みとる能力や，野外調査の能力を育てる。
7.一般的な地理的術語を正しく使用する能力を育てるとともに，地域の特色，人間と自然との関係，地域間の相互関係について，具体的な事例に即して真実をつかんでいこうとする態度を芽ばえさせる。

第６図　昭和30年版中学校社会科地理分野における地理的な考え方の記述
－文部省『中学校学習指導要領社会科編1955（昭和30年度改訂版）』より－（吉田剛作成）

６）昭和30年版（第６図）

昭和30年版は、昭和22・26年版の問題解決学習から系統学習へと軌道修正された背景を持つ。社会科目標(3)の解説部および地理的分野(2)内容の解説部に「地理的考え方」の記述が僅かにみられ、社会科目標(3)の記述全般と、地理的分野の具体的目標１、２、３、７には、地域的特色、地域間相互関係、自然と人間生活との関係などの地理的基本概念に関する記述がみられる[11)]。安藤（1979）によれば、用語としての「地理的見方・考え方」は、戦後、学習レディネスが強調された頃に普及した「地理的意識」に基づき、昭和30年頃から生まれてきた。また長坂（1953）は、昭和26年版

時に戦前の小学校地理教育、とくに国民科地理との対比から「社会科における地理的学習はむしろ知識よりも、地理的な見かた考えかたの啓培をねらうのである」と論じ[12]、地理的見方・考え方が地理教育目標の大きな柱に値し、発達段階に応じて系統立てる必要性や地理的基本概念の「地域」の重要性について先駆的に論じている。よって、昭和30年版前後は、地理的意識から地理的見方・考え方という用語が重んじられ始めた端境期としてとらえられる。

7）昭和26年版

昭和26年版と昭和22年版の一般社会科（第１～10学年）には地理的な内容が多いが[13]、第９・10学年では別に国史（日本史）が独立していた。昭和26年版の中学校社会（一般社会科）の指導目標「理解」では、とくに４「われわれの社会生活が、自然環境とどのような関係をもって営まれているかの理解」、５「各地の文化、たとえば言語、宗教、芸術、風習、衣食住の様式などにいろいろな違いがあるが、その底には共通な人間性が横たわっていることの理解」、6「各地の人々の相互依存関係がどんなに重要であるかの理解」の３項目が地理的な内容となっている。これらには、自然と人間生活との関係、地域的特色、地方的特殊性と一般的共通性、地域的相互関係などの地理的基本概念の意味が含まれ、昭和30年版の地理的基本概念そして今日の地理的見方・考え方へと繋がる。

8）昭和22年版

昭和22年版[14]の冒頭部「社会科とは」では「社会生活の理解」が強調された。そのための相互依存関係は、①人と他の人との関係、②人間と自然環境との関係、③個人と社会制度や施設との関係の３つから説明されている。とくに②は地理的で、「人間と自然環境との関係は、われわれの衣食住の様式が、各地の自然に適応して営まれること、及びわれわれは自然を巧みに利用することによって、自分たちの生活を次第に豊かにして来た事実のうちに見られる。自然環境は、すべて人間によって保護され、保存され、開拓されているものであることを考えると、これに関する青少年の経験もまた、十分深められて、社会生活の理解に至らしめなかればならない」と説明され、ここに、自然と人間生活との関係、地域的特色などの地理的基本概念の意味が確認できる。加えて、社会科目標の中の地理的な内容には、四「生産・消費・交通・運輸等の自然的・社会的条件を理解させること」、五「生徒が日常接触する自然的並びに社会的環境について、科学的に観察する能力を養うこと」、六「世界の自然的環境及び文化は、地域によってさまざまな異なるものであること、並びに各地の人間生活は、その文化的条件のもとで自然に適応しながら営まれていることを理解させること」、七「各地域・各階層・各職域の人々の生活の特質を理解させ、国内融和と国際親善に貢献する素地を養うこと」、八「各地の資源・自然美及び人工美の価値を知って、これを愛護するとともに、進んでこれを開発し、創造する能力を養うこと」などがみられる。これらにも、地理的条件、自然と人間との関係、地域的特色などの地理的基本概念の意味が含まれ、今日の地理的見方・考え方に繋がる地理的基本概念の意味が確認できる。

３．学習指導要領地理的見方・考え方の潮流

１）社会科地理的分野目標の変遷から（第２表）

第２表から、新版や現行版の地理的見方・考え方の中にある地理的基本概念は、昭和22・26年版の社会科目標の中に明確にみられ、それが派生して今日に至っている。つまり、昭和22年版以降、地理的基本概念は、地理学に基づくわが国独自の地理的見方・考え方という用語の意味内容の中で概念的な整理や構造化を伴いながら今日まで引き継がれている。大局的にみれば、戦後、中学校学習指導要領社会の地理的見方・考え方は、抜本的に変容したとは言い切れず、平成元年版以降の事例主義・方法主義の拡大によって複雑に変容し構造化されてきている。

戦後、中学校学習指導要領社会の地理的見方・考え方の源流は、昭和22年版の「地域的特色」と「自然と人間の関係（環境）」の地理的基本概念が中心となる。昭和26年版では「地域間相互依存関係」が加わり、「地域的特色」に関わる「地方的特殊性と一般的共通性」が派生し、潮流の３主流となって平成元年版まで続く。その中で昭和33年版で出現し始めた地理的見方・考え方という用語は、昭和44年版～新版までの分野目標において明確に位置付けられた。ただし、昭和44・52年版と平成元年版では、地理的見方・考え方という

第２表　戦後中学校学習指導要領社会科地理的分野目標における地理的見方・考え方に関する記述の変遷
（吉田剛作成）

学習指導要領	地理的分野目標における地理的見方・考え方に関する指示と記述			
	指示	内容		
昭和22年版*	なし。	社会科指導目標		
		「地域的特色」 (6)：～地域によってさまざまに異なるもの～。 (7)：各地域～人々の生活の特質を理解させ～。	とくになし。	「自然と人間生活との関係」 (4)：～自然的・社会的条件～。 (5)：～自然的並びに社会的環境について～。 (6)：～人間生活は～自然に適応しながら～。
昭和26年版*	なし。	社会科指導目標「理解」		
		(5)：地域的特色および地方的特殊性と一般的共通性。	(6)：地域間相互依存関係。	(4)：自然と人間生活との関係。
昭和30年版**	なし(地理的分野目標は7つ)。	目標(1)：地域的特色。	目標(2)：地域間相互関係。	目標(3)：自然と人間生活との関係。（環境決定論・可能論，自然開発）
		目標(7)：～地域の特色，人間と自然との関係，地域間の相互関係について～		
昭和33年版**	なし(地理的分野目標は6つ)。	目標(1)：地域的特色。 目標(2)：地方的特殊性と一般的共通性。（地理的諸条件から総合的に）	目標(3)：地域間相互関係。	目標(4)：自然と人間生活との関係。（環境決定論・可能論，自然開発）
昭和44年版	地理的見方・考え方は目標(2)(3)(4)で述べている。	目標(2)：地理的事象および地方的特殊性と一般的共通性，地理的諸条件と地域的特色。	目標(3)：地域間相互関係。	目標(4)：自然的・社会的条件と人間との関係。（環境決定論・可能論，地域変容，自然開発保全）
昭和52年版	目標(2)(3)(4)：地理的見方・考え方に基づく地理学習の基本的な概念とそれぞれの概念に即した具体的なねらい。	目標(2)：諸地域の人々の生活を正しく理解するための地理的見方・考え方の具体。(地域的特色および地方的特殊性と一般的共通性)	目標(3)：地域間相互関連。「地域」の考え方。	目標(4)：自然的・社会的条件と人間との関係。「環境」の考え方。（環境決定論・可能論，地域変容，環境や資源の重要性）
平成元年版	目標(2)(3)(4)：具体的なならい「地理的見方・考え方を構成する基本的な概念と関連付けて示している」。	目標(2)：地域的特色の見方や考え方。地域的特色は「地方的特殊性と一般的共通性」から構成。地理的諸条件からの考察。	目標(3)：地域間相互関連。「地域」の考え方。	目標(4)：自然的・社会的条件と人間との関係。「環境」の考え方。（環境決定論・可能論，地域変容，環境や資源と生活）
平成10年版現行版	目標(2)(3)：地理的見方・考え方を構成する基本的な概念と関連付けて示している。	目標(2)：地域的特色の追究視点や方法。（位置や空間的広がりとの関わり，環境条件や人間の営みなどとの関連付け）	目標(3)：地域的特色の特質や性格についての考え方。（地域間相互関連，地方的特殊性と一般的共通性，諸条件の変化による地域変容）	
平成20年版新版	目標(2)(3)：具体的なねらい「地理的な見方や考え方を構成する概念と関連付けて示している」。	目標(2)：地理的な見方や考え方の基礎を培い，地域的特色や地域の課題をとらえさせるという地理的分野のねらいを具体的に示している。（位置・空間的広がり，環境条件や人間の営み，地域的特色や地域の課題）	目標(3)：地域的特色の特質，性格についての考え方を地理的な見方や考え方を構成する概念と関連付けて示したもの。（地域間相互関連，地方的特殊性と一般的共通性からの地域的特色，諸条件の変化による地域変容）	

*　昭和22・26年版は、地理的分野目標がないため、社会科目標から地理的見方・考え方に関する記述を導き出した。
**　社会科目標が一本化される前の昭和30・33年版では、社会科目標においても、地域的特色、地域間相互関係、人間と自然、地方的特殊性と一般的共通性などの地理的基本概念に関する記述がみられる。

用語を通して地理的基本概念を説明する側面が強く、現行版と新版では方法主義の基でそれを、地域的特色をとらえ・考える方法から地理的基本概念を関連付ける説明に主眼が置かれた。

昭和22・26年版の社会科指導目標において、「自然と人間生活との関係」に関わる目標⑷は、他の地理的分野目標の項目⑸～⑺よりも先頭にあげられている。このことは、岩田（2003）による明治期から第二次世界大戦敗戦までの地理教育の歩み（①「地理的情報」教授期・②「郷土認識」重視期・③「地理学的知識」教授期・④「総合的地理認識」試行期・⑤「地人相関認識」重視期）から検討すると、やはり、後期の⑤「地人相関認識」重視期の特徴を引き継ぐ。それに代わって、昭和30年版～昭和52年版そして平成元年版では、地域的特色の理解に関する目標が先頭に立つ。その転換の背景には、①長坂（1953）のように「地域」が重視されたこと、②昭和26年版指導書（p.1）において社会科と社会科学との密接な関係が説明されたことが次の昭和30年版に反映され、自然科学的な側面の強い内容が遠退けられたこと、③昭和30・33年版では典型

的な静態地誌学習であったために地域の枠組みから考える必然性があったこと、などが考えられる。

平成元年版では、分野目標「⑵地域的特色の見方・考え方」が先頭に立ち、現行版では「⑵地域的特色の追究視点や方法」と「⑶その特質や性格の考え方」、新版では「⑵地域的特色や地域の課題」と「⑶その特質や性格についての考え方」などの記述がみられる。また平成元年版は、地理的見方・考え方の具体的な要約②～⑤の文頭部全てにおいて「人々の生活の地域的特色～」と始まり、昭和44・52年版で散在していた意味内容が地域的特色の理解を中心に整理・集約された。現行版と新版ではその要約において、②「地域という枠組みの中で～追究し、とらえること」、③「地域的特色を～とらえること」、④「～踏まえて地域的特色をとらえ、考えること」、⑤「～地域の課題や将来像について考えること」などの記述がみられ、地域的特色に関する理解の仕方についての指示がなされた。

以上から、地理的分野目標の重みは、戦前の地人相関認識→自然と人間生活との関係（昭和22・26年版）→地域的特色の理解（昭和30・33・44・52年版と平成元年版）→地域的特色を中心にした理解の仕方（現行版・新版）へと移り変わり、地理的見方・考え方の構造性そのものやそれを構成する地理的基本概念の重みや捉え方は移り変わってきている。

２）内容構成（具体的な要約）の変遷から（第７図）

第７図から、地理的見方・考え方の内容構成の基準点は昭和44年版といえる。それは、昭和33年版分野目標の地理的基本概念に、「カ:地域の変貌～」が加わったものから構成される。具体的には、ア「地域的特色を比較・関連からとらえる」、イ「地方的特殊性や一般的共通性からとらえる、」ウ「地理的条件から考える」、エ・カ「地域構成や地域変容などの地域の関係や意味を考える」、オ「自然と人間などの関係を考える」などである。これらは昭和52年版まで続くが、平成元年版においては、新たに「①地域の諸事象～」が加わる。また、昭和44年版では、地理的見方と地理的考え方という２つに分けられた用語に簡易な定義づけがなされたが、それらには、現行版や新版のように地理的見方・考え方そのもの、あるいはその構造性について地理的基本概念から直接的に説明されるものではない。よって、昭和44・52年版と平成年版は、昭和22・26・30・33年版を引き継ぎ、地理的基本概念の説明を主眼とする側面が強い。ただし、昭和44年版ではみられなかったが、語尾表現において昭和52年版のア・イと平成元年版の①②③では「～とらえる」、昭和52年版のウ・エ・オ・カと平成元年版の④⑤⑥⑦では「～考える」と整理され、また平成元年版には現行版と新版の①「地理的見方」に繋がる項目①が加わり、昭和52年版と平成元年版の地理的基本概念には、現行版の構造化に繋がる展開性が見出された。

以上から、昭和44年版の地理的基本概念は、昭和52年版と平成元年版において展開性が見出され、現行版と新版において、地理的見方と地理的考え方の枠組みの中で説明されるように整理・構造化されてきている。

現行版や新版では、方法主義に基づく問いや学習過程が一層強調されたため、地理的見方・考え方の構造性は大きく変容することとなった。ただしその反動として、潮流の中にあった地理的基本概念はやや不明瞭となり、平成元年版の④「人々の生活～」と⑥「自然及び社会的条件～」の意味内容は、地理的考え方の三本柱から外れて希薄になってしまった。とくに⑥に関しては、平成元年版地理的見方・考え方の内容構成が地域的特色の理解を中心に整理・集約された中で、地域的特色に触れないやや異質なものとなり、それが現行版や新版に反映されたようにもとれる。しかしその⑥、つまり自然と人間生活との関係に関する地理的基本概念は、戦前の地人相関認識を引き継ぎ、昭和22・26年版の目標の先頭部に位置付く伝統的な地理的基本概念である。そして地理的分野の独自性を発揮していく上でも、世界的なＥＳＤ（Education for Sustainable Development）への着目においても一層重要である。この点は今後、新版の地理的考え方の三本柱あるいは見方・考え方の構造性そのものを発展的に見直すための手がかりとなる。その④も現行版と新版の②「～地域の環境条件～」の中に融合され、存在感が失われたが、もともと分布・立地・環境などの地理的条件を広く考察させる意味内容であるため、⑥ほど問題視する必要性は感じられない。

以上から、地理的見方・考え方の潮流は概ね、①自然と人間との関係などの戦前の「地理」を引き継ぐ地理的基本概念による源流期（昭和22年版）→②地理的見方・考え方の３主流となっていく地理的基本概念の確立期（昭和26・30・33年版）→③地理的見方・考え

第７図　戦後学習指導要領地理的見方・考え方の内容構成（具体的な要約）の変遷
（吉田剛作成）

方としての地理的基本概念の内容構成期（昭和44・52・平成元年版）→④方法主義に基づく地理的見方・考え方の構造化期（現行版・新版）の４期からみることができる。このことは、前項１）の地理的分野目標における地理的基本概念の重みの移り変わりからも重ね合せて理解することができる。加えて、第１表から、⑴「経験主義」（昭和22・26年版）→⑵「内容主義」（昭和30・33年版）→⑶「内容主義＋事例主義」（昭和44・52年版と平成元年版）→⑷「事例主義＋方法主義」（現行版）→⑸「内容主義＋方法主義」（新版）の５期からみることもできる。よって、地理的分野全体の潮流の中で、そして地理的分野目標の変遷の中で地理的見方・考え方の潮流は、地理的基本概念やその内容構成・構造性の重みやとらえ方を通じて変容してきている。

4．むすび

本稿は、戦後昭和22年版から新版までの中学校学習指導要領社会科地理的分野の地理的見方・考え方に関する記述を分析・考察し、その潮流を明らかにすることを目的とした。その結果は次のようにまとめられる。

戦後の昭和22年版以降、地理的基本概念は、地理学の基礎の基で、わが国独自の地理的見方・考え方という用語の意味内容の中で、概念的な整理や構造性を伴いながら今日まで引き継がれていることが明らかとなった。昭和22年版では、戦前の地人相関認識の影響も窺え、自然と人間との関係などの地理的基本概念が示された。昭和26年版では、地域間相互依存関係などの地理的基本概念も加わり、潮流初期における「地域的特色および地方的特殊性と一般的共通性」・「地域間相互関係」・「自然と人間生活との関係」の３主流が見出された。それらは、後の昭和44年版の地理的見方・考え方の内容構成の主流へと続く。昭和30年版前後は、端境期として、地理的意識から地理的見方・考え方という用語が重んじられ、昭和33年版頃には、地理的見方・考え方という用語が既に定着し、昭和44年版には、その内容構成（具体的な要約）が示された。その内容構成は、昭和52年版・平成元年版に引き継がれたが、平成元年版では、新たに地理的事象の把握の項目が加わった。現行版と新版では、方法主義に基づき問いや学習過程が意識され、地理的見方・考え方の構造性が大きく変容したために、これまでの地理的基本概念は統合され複雑に関係付けられた。

以上から、地理的見方・考え方の潮流は、地理的分野の潮流の中で地理的基本概念やその内容構成・構造性の重みやとらえ方を通じて変容してきている。その変容は、①地理的基本概念の源流期、②地理的基本概念の確立期、③地理的見方・考え方としての地理的基本概念の内容構成期、④地理的見方・考え方の構造化期の４期からみることができる。また潮流において、地理学に基づく地理的基本概念そのものは概ね不変的なことが明らかとなった。一方で、各年版の内容やその取り扱いの特色に応じて、地理的見方・考え方そのものの構造性や地理的基本概念の重みや捉え方が変容してきたことも明らかとなった。後者は、地理的見方・考え方のコンセンサスの問題にも繋がり、地理的見方・考え方の育成の促進を妨げてしまう要因となる。この点は吉田（2001）が指摘する、地理的見方・考え方や地理的技能などの関係諸概念の差違が不鮮明な点からも課題として取り上げられる。

今後の課題は次の４つである。

①経験主義や問題解決学習に特徴付けられる昭和22・26年版における地理的基本概念を具体的に解明するために、各年版の「単元目標」・「教材の配列（内容）」などに関する記述について詳細に分析する。さらに社会科導入前の戦前「地理」におけるその源流についても追究する。

②わが国を相対化して今後のあり方を検討するために、諸外国の社会科や地理教育カリキュラムについても比較・考察する。

③「地理的見方・考え方と地理的技能は密接な関係」と新版や現行版で説明されている。そこで、学習指導要領地理的技能の潮流の考察も進め、その関係のあり方を検討していく。また本稿の知見から戦前の国民科地理の指示が地理的技能の源流と推察されるが、その前後や戦後における地図やフィールドワークなどに関する指示からも検討する。

④吉田（2008）は小中高一貫の地理的見方・考え方の育成を提言するが、小学校学習指導要領社会において「地理的環境」の用語はみられるものの、地理的基本概念の意味は顕著に読み取れない。そこで中学校段階の地理的見方・考え方と小学校社会との具体的な関係についても追究していく。

文　献

安藤正紀（1979）：戦後の地理教育における学力観に関する予察的考察．新地理，**27**(2)，pp.40-48.

荒井正剛（1999）：グループ発表学習を活用した諸地域学習．新地理，**47**(2)，pp.33-40.

荒井正剛（2001）：グループ発表学習に個人学習を組み合わせた日本の諸地域学習－県別個人学習と地方別グループ学習の組み合わせ－．新地理，**49**(1)，pp.29-39.

朝倉隆太郎・尾崎乕四郎（1962）：郷土．尾崎乕四郎編『中学校社会科　地理指導の研究と実践』，葵書房，pp.54-104.

岩田一彦（2003）：地理教育の歩み．村山祐司編『21世紀の地理　新しい地理教育』，朝倉書店，pp.1-25.

神山利一（1953）：『中学校の社会科』，岩崎書店，186p.

菊地利夫（1960）：『地理学習の原理と方法』，金子書房，103p.
文部省（1947ａ）：『学習指導要領社会科編(Ⅰ)（試案）昭和二十二年度』，東京書籍，178p.
文部省（1947ｂ）：『学習指導要領社会科編(Ⅱ)（第七学年－第十学年）（試案）昭和二十二年度』，東京書籍，302p.
文部省（1952）：『中学校高等学校学習指導要領社会科編Ⅱ一般社会科（中学校１年－高等学校１年中学校日本史を含む）（試案）昭和26年（1951）改訂版』，明治図書，205p.
文部省（1956）：『学習指導要領社会科編　昭和30年度改訂版』，二葉，41p.
文部省（1959）：『中学校社会指導書』，実教出版，310p.
文部省（1970）：『中学校指導書社会編』，大阪書籍，448p.
文部省（1978）：『中学校指導書社会編』，大阪書籍，202p.
文部省（1989）：『中学校指導書社会編』，大阪書籍，173p.
文部省（1999）：『小学校学習指導要領解説社会編』，日本文教出版，176p.
文部省（1999）：『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－社会編－』，大阪書籍，208p.
文部省（1999）：『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』，実教出版，336p.
文部科学省（2008）：公式サイト（www.mext.go.jp）（８月20日確認）
長坂端午（1953）：『社会科教育』，金子書房，178p.
大森昭夫（1969）：社会科の目標．大森昭夫編『改訂中学校学習指導要領の展開社会科編』，明治図書，pp.17-37.
澁澤文隆（1991）：中学校社会科改訂と地理的分野．澁澤文隆編『新学習指導要領の指導事例集』，明治図書，pp.9-25.
澁澤文隆（1998）：「身近な地域」を生かした日本の諸地域学習の授業改善．社会科教育研究，**80**，pp.9-20.
篠原昭雄（1989）：『中学校社会科新旧学習指導要領の対比と考察』，明治図書，274p.
滝口昭二（1973）：小中高における地理的見方考え方の系統．新地理，**21**(2)，pp.20-32.
吉田　剛（2001）：地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業の改善－単元「アメリカ五大湖南岸工業地域」の場合－．社会科研究，54，pp.31-40.
吉田　剛（2003ａ）：地理的技能を育成する高校地理授業の設計－「野外調査」の授業づくりを通して－．新地理，**50**(4)，pp.1-12.
吉田　剛（2003ｂ）：高校生の大陸・国家に対するイメージの空間性と空間認識について．社会科教育研究，**90**，pp.1-14.
吉田　剛（2006）：高校生の世界イメージ形成について－間接情報の影響に着目した地理教育の課題．地理科学，**61**(2)，pp.34-38.
吉田　剛（2007）：学習指導要領地理的見方・考え方の潮流－諸概念の役割と構造性－．季刊地理学（東北地理学会），**59**(3)，pp.152-153（研究発表要旨）.
吉田　剛（2008）：地理的見方・考え方と一貫カリキュラム．山口幸男・西木敏夫ほか『地理教育カリキュラムの創造－小・中・高一貫カリキュラム』，古今書院，pp.103-108.

注

1）現行版の教科改訂の要点は次の５点である。①学習過程や学び方を学ぶ学習の重視による教科目標の見直し、②知識詰め込み回避のための厳選、③生きる力のための見方・考え方や調べ方や学び方を学ぶ学習の充実、④社会変化対応による内容の刷新・更新、⑤３分野の関連付け。地理的分野改訂の要点は次の４点である。①小中高一貫から中学校では広い視野に立った我が国の国土認識に重点化、②日本と世界の諸地域学習を見直し厳選と学び方を学ぶ学習の充実、③広い視野に立った我が国の地理的認識を深めさせる、④基礎となる知識や調べ方学び方を身に付けさせる。

2）新版の教科改訂の要点は次の３点である。①基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得、②言語活動の充実、③社会参画、伝統や文化、宗教に関する学習の充実。地理的分野改訂の要点は次の６点である。①分野目標の見直し（「世界の諸地域」「地域的特色や地域の課題」の表記）、②内容構成の見直し（「世界の様々な地域」と「日本の様々な地域」）、③世界に関する地理的認識の重視（世界地誌学習の復活）、④動態地誌的な学習による国土認識の充実（日本地誌学習の復活）、⑤地理的技能の育成の一層の重視（地理的見方・考え方の育成に不可欠な地図活用の重視）、⑥社会参画の視点を取り入れた身近な地域の調査（改正教育基本法・学校教育法や社会科目標の公民的資質の育成から）。

3）吉田（2006）では吉田（2003）と同じ被験者へのアンケート調査から世界の大陸・国家に対するイメージが主にマスメディアによる社会への情報流通の役割を介して、生徒を取り巻く学校、教師、家庭、地域社会などの社会環境全体から、経年的に重層的な影響を被り、その関わり合いの中で形成され、大局的には日本の社会観において世界の国々に対する一定の格付けがなされていると論じている。

4）そのような地理的基本概念について、例えば、吉田（2001、2003ａ、2008）では、概念的な整理・検討に基づいて「空間」・「場所」・「立地」・「環境」・「地域」などから論じている。

5）岩田は、昭和22・26年版は問題解決過程として展開されるコア・カリキュラムに基づく「経験主義」として、昭和30・33年版は「経験主義」の「基礎・基本の欠落」などの問題の克服を図った「内容主義」として、昭和44・52年版

は「内容主義」の知識過剰などの問題の克服や知識の一般化をねらった「内容主義＋事例主義」として、平成元年版は告示本体の内容から単に「内容主義＋事例主義＋方法主義」として各々説明している。

6）平成元年版の教科改訂の要点は次の４点である。①国際化・情報化の進展への対応、②内容精選と各分野の授業時数の割合の設定、③「適切な課題を設けて行う学習」の設定、④選択教科としての「社会」の新設。地理的分野改訂の要点は次の４点である。①教科目標との関連から分野目標の見直し、②取り上げる地域の精選と重点化、③日本の世界を構成する一地域として両者を比較関連付ける学習、④小中高一貫からの重複や関連の調整および日本の諸地域学習の重視。

7）昭和52年版の教科改訂の要点は次の３点である。①小学校の発展として国土認識と自国の歴史の理解を中核に、日本の国民として、また地域社会の住民として必要な基礎的教養を培う、②単なる知識偏重の学習に陥らず、社会科としての思考力、判断力などが十分育成できるような内容の構成や各項目の選択、③教科の基本的構造に基づく内容構成とともに各分野の関連の重視。地理的分野改訂の要点は次の３点である。①「世界とその諸地域」先習、②「身近な地域」を「日本とその諸地域」の中項目へ、③内容精選の具体化。

8）昭和44年版では①目標の明確化、②内容の改善（分野の性格の明確化、内容の精選と構造化、分野の学年配当の改善）が教科改訂の要点となった。地理的分野の改訂は次の４つである。①「身近な地域」は「郷土」を受け継いだが、内容を簡素化し、興味や関心を高め、地理的な見方・考え方の基礎に重点をおいた、②「日本とその諸地域」は日本にさまざまな地域があることを理解させ、各地域の変化展開に着目させ、それらの地域を日本を構成する一部として把握すること、地理的に考察する力を養うことなどに重点をおいた、③「世界とその諸地域」は、人間の生活舞台としての地球に関する基礎的な理解を養うこと、諸地域の変化発展に着目させ、諸地域の結びつきがますます密接になってきたことなどを重視した、④「世界の中の日本」は日本や世界の諸地域の学習によって養われた目で日本を全体的に見直し、わが国土に対する認識を深めさせるようにした。

9）大森（1969）も昭和44年版の「地理的見方・考え方」について、地理学の中心概念である分布、環境、地域に基づくものであると説明している。

10）昭和33年版の教科改定の要点は、第１学年で地理的分野を原則とし日本と世界の地誌学習を重点化し、第２学年で歴史的分野を原則とし日本史の学習を重点化し、第３学年に政治・経済・社会的分野を原則とし、社会科の道徳的内容の整理と道徳の時間の指導との関連化が図られた。

11）昭和30年版は①義務教育一貫の立場から目標と内容の示し方に十分な連絡を保たせる、②必要な事項の充実と全体における精選、③「一般社会科」と「日本史」の社会科の指導計画の一本化、④３分野に分けて提示、⑤社会科の学習内容に即して道徳的な理解や判断力の育成、が改訂の要点となった。地理的分野は、１．日本の諸地域、２．全体としての日本、３．世界の諸地域、４．全体としての世界、５．郷土の５つとなった。

12）国民科地理は1937年（昭和12年）３月文部省訓令第９号の中学校教授要目地理の目標による。長坂（1953）は、国民科地理の教則中の「自然ト生活トノ関係ヲ具体的ニ考察セシメ」で「考察」ということばがはじめて現れ、知識注入型から地理的に見たり考えたりする能力を重視する立場への移行を指摘した。ただし長坂は、国土や国勢に対する狂信的観念が強く、事実に即してとらわれない眼で自由に見たり考えたりすることが妨げられ、各地域を一わたりまわってわが国土の概観をもたせる意図が圧倒的に強く、見かた考えかたは、単に方法として尊重されたが、以前と同じ知識の注入に傾いて、軽視されがちであったと論じている。また長坂は、同じ教則中の「簡易ナル見取リ図、模型ノ製作等適当ナル地理的作業ヲ課スベシ」・「読図力ノ養成ニ力メ遠足旅行其他適当ナル機会ニ之ガ実地指導ヲ為スベシ」について指摘し、地理的見方・考え方と同様、以前の教則中の「知ラシメ」という表現のみの教科書中心の地理教授からみれば大きな革新であったと論じている。この点は、今日の地理的技能の育成の源流として捉えられる。

13）昭和26年版は①単元の数を減らす、②国際的理解を深める、③社会生活の歴史的発展の理解を深める、④他教科とのむだな重複を避ける、⑤高等学校１年の一般社会科を上学年までの分化社会科の基本と改める、⑥知識や理解事項のみならず態度習慣技能なども重視する、⑦各単元の内容を簡潔にする、⑧学習活動の例をできるだけ一般的なものにし、また評価法も改善する、⑨各単元の末尾に参考資料をつける、など９つが単元改定の方針であった（神山、1953）。

昭和26年版の地理的な単元は、第１学年（主題「われわれの生活圏」）では、とくに第２単元「わが国土はわれわれに、どんな生活の舞台を与えているか」、第３単元「世界の人々の衣食住の様式は、それぞれの土地の自然とどのように結びついているか」、第４単元「世界の諸地域は、どのように結びついてきたか」、第２学年（主題「近代産業時代の生活」）では、とくに第１単元「都市や村の生活は、どのように変わってきたか」、第２単元「近代工業はどのように発達し、われわれの日常生活に、どんな変化を与えたか」、第３単元「天然資源を、いっそう有効に利用するには、どんなことにこころがけたらよいか」。これらの単元内容からは、国土と世界の地理的事象を対象とし、第７学年の地誌から第８学年の系統地理的なアプローチへの積み上げの意図が窺える。第３学年は歴史および政治・経

済・社会的分野（主題「民主的生活の発展」）となる。

14）教科そのものの内容によって系統立てず、生徒の生活経験を中心に学習内容を数箇の大きな問題に総合して、経験学習と単元学習、生徒が社会的な問題を解決する問題解決学習のかたちをとった（篠原、1989）。

昭和22年版の地理的な単元は、第７学年（中学校第１学年）の(Ⅰ)「日本列島はわれわれに、どんな生活の舞台を與えているか」、(Ⅳ)「わが國のいなかの生産活動は、どのように営まれているであろうか」、(Ⅴ)「わが國の都市はどのように発達してきたか。また、現在の都市生活にはどんな問題があるか」、第８学年の(Ⅰ)「世界の農牧生産はどのように行われているか」、(Ⅱ)「天然資源を最も有効に利用するためにはどうすればよいか」、(Ⅲ)「近代工業はどのように発展し、社会の状態や活動にどんな影響を與えて来たか」、(Ⅳ)「交通機関の発達はわれわれをどのように結びつけて来たか」、(Ⅴ)「自然の災害をできるだけ軽減するにはどうすればよいか」などである。

付　記

本稿は2006年度日本社会科教育学会と2007年度春季東北地理学会における研究発表の成果の一部を加筆・修正したものである。また、平成19・20年度科学研究費補助金（若手研究スタートアップ）「シンガポール地理カリキュラムに関する研究－わが国との比較を通して－」（課題番号：1983007）の成果の一部でもある。

（平成20年９月29日受理）